

車いすダンスサークルの実践とその効果

A Report of an Activity Example and the Effect of the Wheelchair Dance Circle

増 山 尚 美

MASHIYAMA, Naomi

1 はじめに

近年では年金制度改正や医療費負担増といった経済的な不安とあいまって、健康への関心が高まっている。自助努力で健康を維持し生きがいのある余暇時間を送るために、運動に関心を持ちウォーキング等を実践する中高齢者も増加している。生涯学習や生涯スポーツは全ての人を対象であるにもかかわらず、障がいのある人は行政的にも異なる機関の管轄にあり、これまで分けて考えられることが多かった。しかし、高齢社会を迎えた日本では、人口比率に占める障害者数は増加し、障がいの程度も重症化の傾向にある。これは医療の進歩により脳血管障害等の発病後に命を取り留めるが機能障がいが残る中途障がい者が増加したことと、障がい者も高齢になるにつれてより重い障がいに移行することによる。

人間はどのようなときに笑顔になるのか。札幌市で活動する車いすダンスサークル「ハーモニー」の活動を初めて見たときに、踊る人たちの笑顔から音楽と一体となって踊る喜びが伝わり、見ている自分も自然に笑顔になっていた。指先まで感情を込めて全身で表現する姿は心の表れに他ならず、障がいのある人、ない人といった身体機能の違いを超えてひとつになっていた。踊る人と見る人のエネルギーを引き出す祝祭的な雰囲気情感が高まり、これこそがダンスだと思った。そして、この感動を呼び覚ます活動をより多くの人たちと共有したいと思った。

2007年2月に内閣府が実施した「障害者に関する世論調査」の結果によれば、「共生社会」の周知度については60%を超える人が「知っている」と回答している。「障害のある人が身近で普通に生活しているのが当たり前」との考え方についても、約85%の人が支持しており、「共生社会」の考え方が普及してきていると報告されている。障がいのある人とない人とが一緒に踊る車いすダンスの活動は、ノーマライゼーションや共生社会について考えるひとつの事例になると考える。

目的

本研究では、札幌市と滝川市を中心に活動している車いすダンスサークルの事例を報告するとともに、実践者へのアンケート調査から車椅子ダンスによって身体、気持ち、生活の面でのどのような意識の変化が見られたかを明らかにすることを目的とする。

方法

札幌市及び滝川市において同じ指導者のもとの車いすダンスサークル活動を行う会員に対し、アンケート用紙をレッスン時に配布し郵送で回収した。調査実施期間は2007年9月13日から10月1日であった。集計後 χ^2 検定を行った。さらに指導者へのインタビューを2007年9月13日に行った。創設7年目に記念公演が行われた際に発行された「車いすダンスフェスティバル LOVE 2006 車いすダンス～hoo～報告書」³⁾を参考にした。

2-1 障害者におけるスポーツ・ダンスの実施状況と目的

障がい者のスポーツは、第2次大戦後にリハビリテーションを目的としたものを中心に急速に発展した。現在では、パラリンピックに代表される競技やレクリエーションを含む生涯スポーツとしての広がりを見せている。

パラリンピック長野大会後、競技としての認識が急速に進んだ。リハビリテーションを目的に厚生労働省のもとで発展してきた(財)日本障害者スポーツ協会が2000年には(財)日本体育協会に加わった。障害者の国際スポーツ大会については、2006年度はフェスピックアラルンプール大会に162名の選手が、冬季デフリンピック・ソルトレーク大会に17名の選手がそれぞれ出場し、金メダルを獲得する¹⁾等活躍が目立ってきた。

スポーツ振興施策では2010年までにすべての成人の50%が週1回以上の運動を実践することを目標に掲げている。2006年度の調査による週1回以上のスポーツ参加率は44.4%である。日常生活における成人男性の目標歩数9,200歩以上に対し、8,202歩(1997年)から7,532歩(2004年)に減少し、目標の見直しが図られ、達成にはまだ遠い。他の先進国と比較して低い傾向にあるアクティブスポーツ人口を増加させ、現在スポーツを行っておらず関心も薄い層の意識を変えさせる働きかけが必要といわれる。

平成19年度「障害者白書」¹⁾によると日本における障害児者数は身体障害、精神障害、知的障害を合わせ約656万人といわれる。これは日本の人口のおよそ5%にあたる。18歳以上の障害者が1年間にスポーツを実施した割合は8%という調査結果がある。運動による体力維持に効果が期待できる定期的な活動である週1回以上実施者の割合はきわめて低くなる。生活習慣病予防には、運動と栄養のバランスがとれた生活が重要である。車イス使用者は下肢の運動が制限されているためエネル

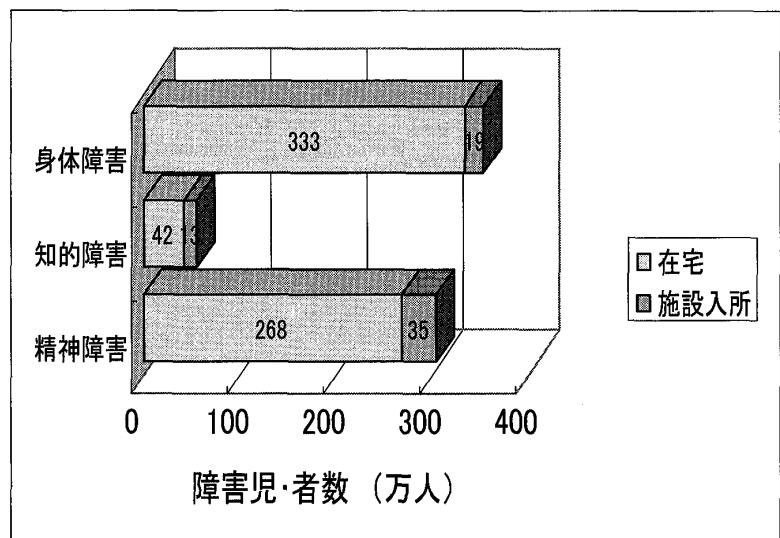


図1 在宅・施設入所別障害児・者数
(平成19年度「障害者白書」をもとに作成)

ギー消費量が少なくなる。そのため肥満、糖尿病、冠動脈疾患などのリスクは、健常者と比較すると高いといわれる。障がいのある人が生活のなかに運動を習慣化させることのむずかしさは、障がいに加えて他の面でも阻害要因があると考えられる。「障害者自立支援法」が2006年4月から施行され、施設入所から在宅へと福祉政策が転換された。在宅障がい者に運動の機会が増えることは障がいの軽減、リハビリテーション効果への期待もある（図1・2）。

近年アダプテッド・スポーツ⁴⁾やアダプテッド・ダンスのように、年齢、性別、障がいの有

無等にかかわらず、異なる条件の人たちが一緒に活動できる特性を持つ、新しい視点による身体活動も注目されている。障がいがあったり高齢になって体力や機能が低下するため運動が出来ないと考えるのではなく、ルールや方法を変えたり新たに考えたりする事によって、スポーツ等身体活動のほうを人に合わせて、全ての人が享受できるようにするものである。

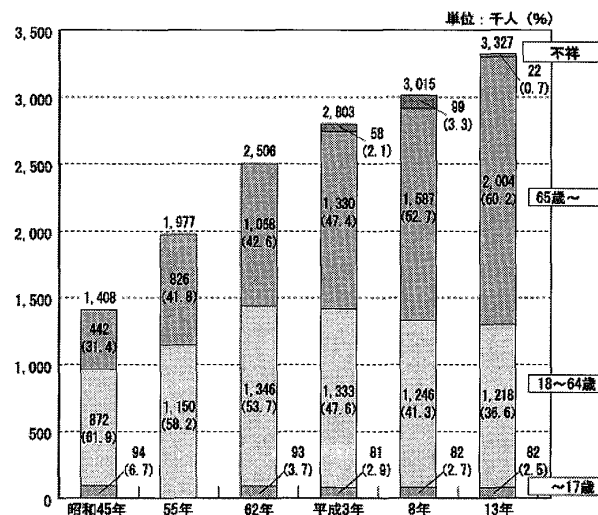


図2 年齢別障害児・者数の推移
「平成19年度版障害者白書」から転載

2-2 車椅子ダンス

(1) 歴史

車いすダンスは、1950年代にイギリスで自然発生的に生まれ、車いす使用者同士で踊るディオスタイルを中心にヨーロッパ各地で行われるようになったと言われる。1960年代になるとミュンヘン工科大学のゲートルード・クロムフォルツ博士が障がい者スポーツとしてボールルームダンスを取り入れた。立って踊る人（スタンディングパートナー）と車いすに乗って踊る人（ウィールチェアドライバー）の二人で踊るコンビスタイルを考案し、普及させた。車いすダンススポーツは、1997年に国際パラリンピック委員会において、コンビスタイルでの車いすダンスがパラリンピック冬季プログラム種目として認める決定がなされた。2004年にはアジア・太平洋地区で初めて日本で世界選手権大会が開催された。日本では四本信子氏がドイツとオランダで車いすダンスの方法を学び、帰国後普及に努めNPO法人日本車いすダンス・スポーツ連盟として全国的に活動している。競技や社交ダンス以外にも、フォークダンス、レクリエーションダンスの連盟もあり、創作ダンスやヒップホップ、YOSAKOIソーラン祭りでの発表等、幅広い活動が行われている。プロのダンスカンパニーやダンサーも育っている。

3 車いすダンスサークルの活動状況

(1) 会員数

2007年10月現在、札幌で活動するサークル「ハーモニー」の会員数は28名（ウィールチェア

ドライバー11名、スタンディングパートナー17名)である。週2回のペースで練習を行うと主に、発表やボランティア活動にも盛んに取り組んでいる。滝川市では2002年から札幌の「ハーモニー」と同じ千葉京子さんが指導を始め、現在17名の会員で、土曜・日曜を中心に1ヶ月に3回のレッスン(2008年から週1回に増える予定)を行っている。

(2) 活動内容

発足した2000年度から、札幌市身体障害者スポーツ施設において週1回の定期的なレッスンを行うと伴に「ときめきランド2000」「1000人ダンスフェスティバル」等に出演した。2001年度は、岩見沢高等養護学校、真駒内養護学校での指導を開始(～2003年)、生涯学習市民カレッジ「車いすダンス講座」(12回)、体験講座、実技講習&デモンストレーション、石狩市社会福祉協議会主催講座等普及活動の回数も増える。このころから「週1回のレッスンが週2回となり、会員の技術向上がめだってきた³⁾。」ダンスボランティアの活動も開始する。

(3) サークル発足の経緯

1) 「ハーモニー」札幌市

2000年4月に車いすダンス「ハーモニー」を発足。サークル報告書によると、サークル代表及び指導者の千葉京子さんが「街中で車いすの人を見つけては車いすダンスの説明を様々な場所で展開した。障がい者スポーツの団体(スキー等)や福祉関係の役所に足を運び「ハーモニー」発足の説明、意見等に耳を傾け勉強を重ねる³⁾。」というように、一人一人声をかけることから熱意が伝わり、サークル発足につながったことがうかがえる。同年8月には「日本車いすダンス・スポーツ連盟」札幌支部として認定される。

2) 滝川市サークル

2003年に結成、活動開始。札幌市生涯学習センター「ちえりあ」での講習会に滝川市から参加者があり、滝川市ライオンズクラブの催しで踊りを披露した。これがきっかけで市民から声が上がってサークル結成に至る。

(4) 指導者千葉京子さんのプロフィールと指導の理念

従来から、ボランティアに関心を持っており、30歳代で在住していた稚内市のボランティアセンターに登録する。障害者施設や病院の精神科において入所者の話し相手や、子供たちと山と一緒に登る等の活動をしていた。ボールルームダンスはアマチュア歴10年弱を経て平成3年にプロとなった。車いすダンスとの出会いは、稚内市の車いすの青年1名からのやってみようという声がかっけとなった。1997年に「日本車いすダンス・スポーツ連盟」(東京)理事長の四本信子氏に師事する。

「日本車いすダンス・スポーツ連盟」は国際パラリンピック連盟の日本支部組織に認定されているが、活動目標は競技会入賞においていない。「講習会、施設訪問、ステージ出演等で車い

すダンスのスポーツ性、芸術性、そして人と人とのふれあい、生きる喜びを実感できる社会づくりを目指して活動を展開している³⁾。」

(5) ダンスの形式

競技ダンスで用いられるコンビスタイル以外にもデュオスタイルやフォーメーションを取り入れている。コンビスタイルのスタンディングパートナーが欠席しパートナーがいない時は、せっかく参加しても練習が出来なくなるが、車いす同士でルンバやワルツをデュオスタイルで行う事が出来る。数名が同時に踊るフォーメーションは皆と触れ合うという特性がある。また、それぞれの人に合わせたソロ作品の創作も行っている。ダンス音楽以外に唱歌やポピュラー・ソング等、親しみやすいものや叙情的な曲も使用する。



写真1 コンビスタイル



写真2 デュオスタイル

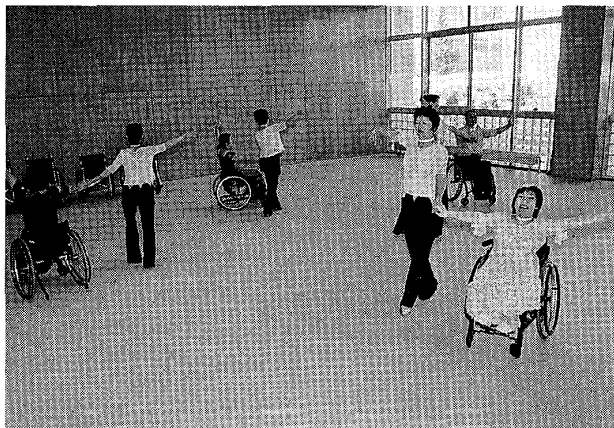


写真3・4 フォーメーション スタイル
車イスダンスサークル「ハーモニー」のメンバーによる演技

4 調査結果

(1) アンケート回収数は22件であった。回答者の年代別人数は30歳代から70歳代にまたがり、50歳代が9人、41%で最も多かった(図1)。性別は女性21名、男性1名であった。22人中ウィールチェアドライバーが11名、スタンディングパートナーが9名、不明2名であった。

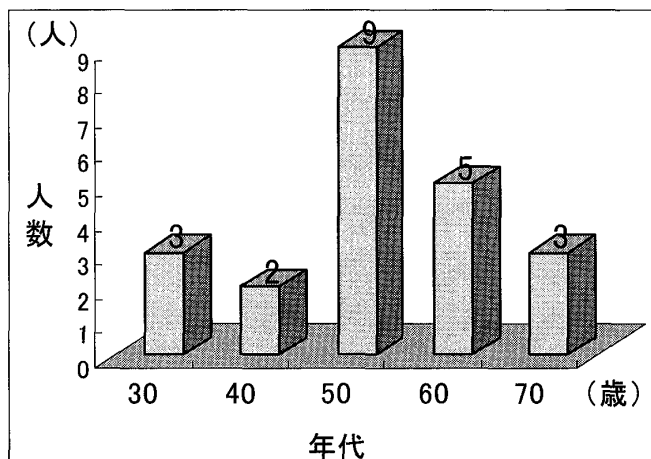


図1 サークル会員の年代別人数

(2) サークルに参加した時期は、札幌市で発足した年の2000年と滝川市で発足した2003年、続く2004年が5名以上で多く、そのまま会員として継続する人が多い。他の年は微増であった(図2)。

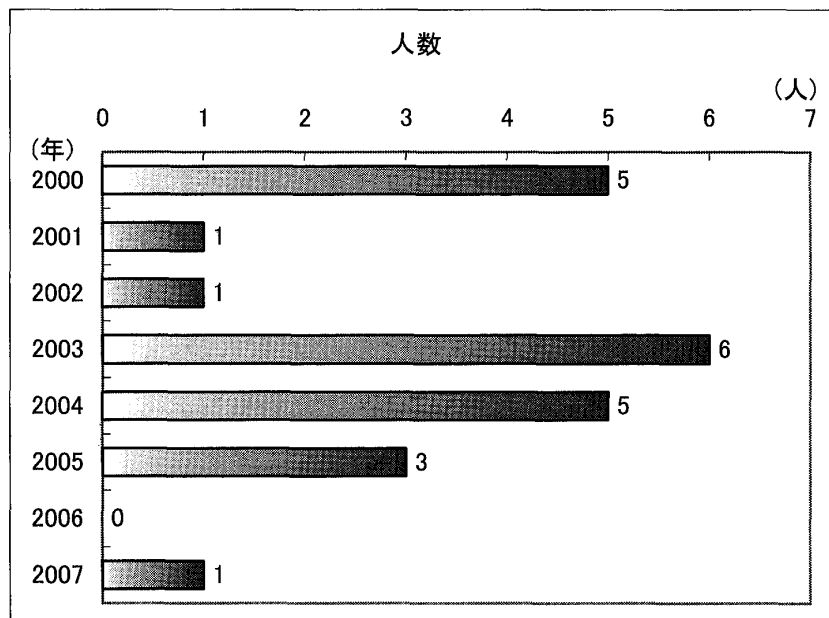


図2 サークル入会年

(3) 参加のきっかけは複数回答で23件中、「b参加者から誘われて」が9件(39.1%)、「cイベント等の活動を見て」7人(30.4%)、「dその他」5人(21.7%)、「a先生から紹介された」2人(8.7%)の順であった(図3)。

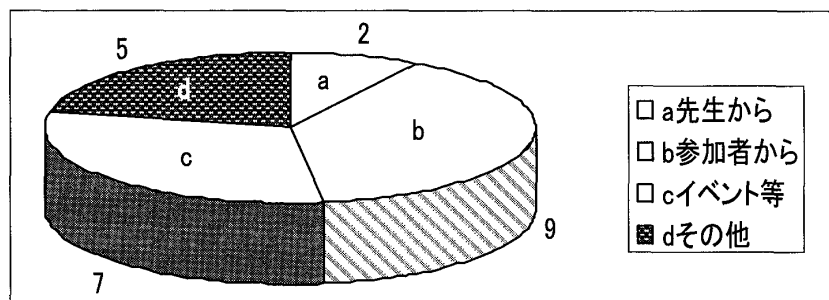


図3 サークル参加のきっかけ

「その他」の内容は、ウィールチェアドライバーでは『札幌「ハーモニー」に知人がいましたので/北海道新聞の募集記事を見て入会しました/体調を崩して社交ダンスができなくなり、サークルがある

ことを知り、見学に行ってもらったことにした』スタンディングパートナーでは『知人に誘われて/姉が突然障害者になったので共に楽しみたいと思い始めました/ちえりあ講習会に参加、車いすボランティアをしている知人に声をかけられた、大学の夏期講座でノーマライゼーションを知った/以前先生の教室に見学に行ったことがあり、その先生が滝川に来てくれる

とおっしゃって下さったので会を作りましました』であった。

(4)「ハーモニー」参加前にダンスの経験があったかでは、

「ある」6名(27.3%)、「ない」16名(72.7%)で、「ある」と答えた人は全てがウィールチェアドライバーであった。ウィールチェアドライバーで「ある」と答えたのは約

半数であった。経験の内容と年数は『社交ダンス(障害者になる前)5~6年、他県の支部に在籍2年/以前に車いすダンスを習っていた約6ヶ月/社交ダンスのサークルを健康のために続けてきた約12年/青春時代に友人たちとダンスホールで踊った約3年/YOSAKOIソーラン5年』であった(図4)。

(5)活動に参加してから生活面で変化があったかは、「ある」16名(72.7%)、「ない」6名(27.3%)であった(図5)。「ある」と答えた人の内容は表1のとおりである。

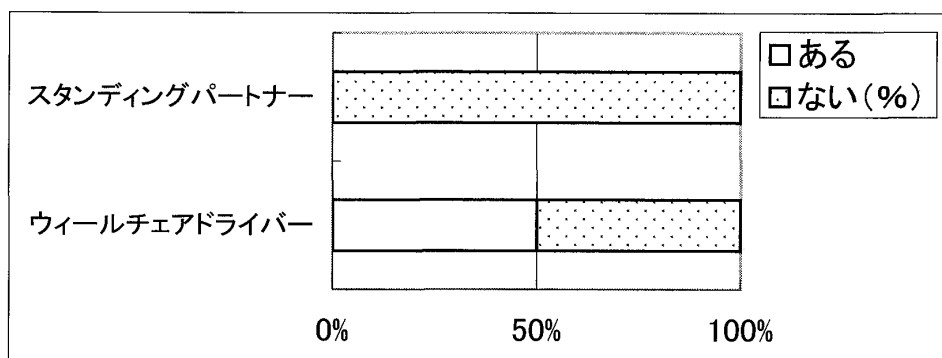


図4 サークル活動前におけるダンス経験の有無

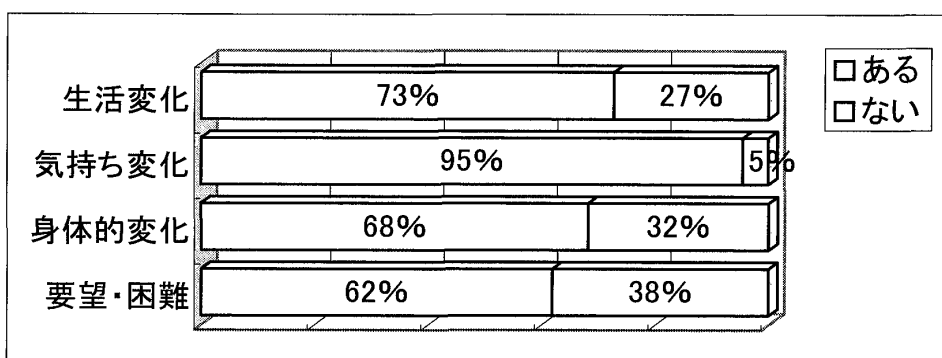


図5 サークル参加後における変化の有無

表1 活動に参加してから生活面で変化があったこと

ウィールチェアドライバー

- ・脳出血で倒れてから、病院と施設の生活で外出する機会がほとんどなかったが、車いすダンスを始めてからは、1週間に1度の練習やイベント参加など、外出の機会が増えた。
- ・心から生きているという実感を味わいました。
- ・練習が楽しい。先生の美しい踊りに魅せられて身体が続く限り踊りたいし、感動を知ってもらい、私も感動しています。生活面もメリハリがついていると思う。週1回なので木曜日が待ち遠しい日々です。

- ・生活にめりはりがつきました。一週間が過ぎるのが早く感じられダンスが楽しみでした。体力がつきました。
- ・レッスン日にあわせて体調管理しています（食事等に気をつける）。
- ・毎日同じ生活で暮らしてましたが、練習日という日は何事があっても後にして行く様に努力しています。自営業なので自分で時間を調整しているのですが、出来ないこともあります。
- ・服装に気をつかうようになった。

スタンディングパートナー

- ・目標を持って、楽しみと生活に“はり”が出来た。
- ・今まで車いすに乗ってみてどうか？その他について関心がなかったのですが、車いすのあつかいなど試してみて、不自由なことを日常の生活の面で車いすだとこれは危ないなどふっと考えるようになりました。
- ・時間をうまく使い、ダンスの時間を作るようにした。メリ、ハリのある生活になってきました。
- ・食生活の面で、いろいろ考えるようになりました（食べ過ぎないように）
- ・障がい者から元気をもらう。ダンスのたのしさを知った。
- ・張合いが出来、楽しく、練習は苦しいときもありますが、練習日が待ち遠しい毎日です。

ダンサーのパートが不明だった人

- ・体を動かすことで気分が晴れます。
- ・着るもの（おしゃれ）に気を使うようになった

（6）活動参加後の気持ちの面での変化について、変化が「ある」と答えた人は21人（95.5%）「ない」1人（4.5%）で、ほとんどの人にとって気持ちの面での変化が見られた。その内容は表2のとおりである。

表2 活動に参加してから気持ちの面で変化があったこと

ウィールチェアドライバー

- ・気持ちに張りが出てきた。色々な人と関わることで、気持ちが切り替わり、ストレス解消になる
- ・自分を見つめる機会を得ました
音楽を聴いて身体を動かすということがとても楽しいことがわかった！

- ・私にもこんな素晴らしいことができるんだと車いすダンスに出会って本当に良かった
- ・車いすダンス以外にもジャズダンスなど積極的に行動できるようになった
- ・家に閉じこもりがちなのが、参加することにより社会性がつく
よりいっそうよくなるよう努力したい
- ・ボランティア等の行動もあり、今までとは違う世界が広がるような気がします。
- ・生活に張りがあると思います。
- ・気持ちが若くなった

スタンディングパートナー

- ・ボランティア活動等で自分を見つめ直すきっかけとなる
- ・パートナー同士の気持ちの通じ合いが必要で、踊っていても通じ合わなければつまらないですし、相手にこちらから気持ちを通じ合えるように心掛ける様になりました
- ・ダンスをする喜び、いろいろな人に喜んでもらえる事に、自分が一番うれしく感じます
- ・障がいのある人がダンスをしているときの笑顔を見ると、気持ちが優しくなれるような、自分を優しい気持ちにさせてくれるような力があるものだと思います。
- ・障がい者から生の声を聞くことが出来たことで、自分の心も広くなり健康への感謝を毎日感じます
- ・皆様の前で踊れる勇気が少し育ったかもしれません
- ・障がい者の方達がとっても頑張っていて自分も頑張ろうと元気が出る
- ・今までの自分とは違う自分を見つけることが出来ました

ダンサーのパートが不明だった人

- ・希望がかなえられる
- ・楽しい、張合いが出来た

(7) 活動に参加してから身体面で変化があったかについて、「ある」15名 (68.2%)、「ない」7名 (31.8%) であった。その内容は表3のとおりである。

表3 活動に参加してから身体面で変化があったこと

ウィールチェアドライバー

- ・長い時間外出しても大丈夫という身体面での自信がでてきた
- ・リハビリにもなるので良かったと思う
- ・体力がついた
- ・悪かった体の部分が先生のご指導で良くなってきた

- ・姿勢がよくなった（2名）
- ・姿勢に気を配るようになりました。自分を飾るようになった（化粧とかアクセサリーとかマニキュアとか）。女性としてめざましいといたら笑われますが（本当です）。
- ・人にはいろいろな体の悪い人がいて大変だという事がわかる様になってきた

スタンディングパートナー

- ・姿勢を正す事、日々気を付けている
- ・私生活において姿勢を良くと心掛ける様になった
- ・普段の生活でも姿勢を伸ばすように心掛けるようになりました。
- ・肩凝りが少なくなったこと
- ・運動不足解消

ダンサーのパートが不明だった人

- ・姿勢を気をつけるようになった

（8）活動に参加するようになって困ったことや要望があるかについて、「ある」13人（77.2%）「ない」8名（38.1%）で、内容は表4のとおりであった。

表4 活動に参加するようになって困ったことや要望

ウィールチェアドライバー

- ・最初の頃は介護タクシーを使用して通っていたため、とても不便でお金もかかった。介護タクシーは台数が少ないため予約を取るのが大変、介護料金も取られるので高額。昨年、特殊車購入。雨の日や雪の日は乗り降りが大変
- ・活動したくとも困ることは冬です。夏は自家用車でどこでも行けますが、冬道は走れないので、冬の練習にあまりこれなくなるのが一番困っています。
- ・練習会場の確保、交通手段等
- ・短所（ドキドキして必要以上に心配してしまう）を直したい
- ・行きたい時でも仕事があると残念ながら行けないのが悔しいと思う

<要望>

- ・男性が少ないのでダンスを楽しめる男性を募集しています。

スタンディングパートナー

- ・初心と現実との差
- ・福祉センターの駐車場が少ない。駐車場のアスファルトがでこぼこしていて整備されていないので車椅子の人を車に乗せるとき大変

- ・練習回数が少ないのもあるのか？物覚えが悪いのか？なかなか思う様に動けない

<要望>

- ・ウィールチェアドライバーの人数が少ない事と、全体の年齢が高いのもう少し若い方が入ってくると良いのですが
- ・ウィールチェアドライバーの人数が少ないので、入会者を希望します。特に若い人
- ・ひとりでも多くの方にこの活動を、この楽しさを知っていただき、参加していただくには…と

ダンサーの役割が不明だった人

- ・対人関係がうまく出来ません（私に協調性がない）

(9) ハーモニー以外に定期的に活動している趣味や学習があるかについて、「ある」17名（77.3%）「ない」5名（22.7%）で、内容は表5のとおりであった。

表5 ハーモニー以外で定期的に活動している趣味や学習

ウィールチェアドライバー	スタンディングパートナー	パートが不明の人
<ul style="list-style-type: none"> ・ワープロ 2年 ・卓球（車いすにのって）8年 ・卓球 1年 ・歩くスキー 6年 ・パークゴルフ 5年 ・水泳 7年 ・お茶（訪問してもらって）3年 ・手話 7年 ・手話 4年 ・お花 4年 ・ヒップホップ 2年 ・社交ダンス・ジャズダンス・ジャズバレエ 1年 ・ペン習字 5年 ・車いすバスケットボール 30年以上 ・車いすマラソン 30年以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・多言語サークル 4年 ・書道研究 25年 不登校児童 ・生徒のふれあい 5年 ・バドミントン 26年 ・フラワーアレンジメント 5年 ・手話 10年 絵手紙 7年 ・福祉施設での行事参加、ケア活動、食事介助 18年 ・サークル（学習的なものと趣味的なもの）20年 ・福祉関係 6年 ・ピアノ 10年 	<ul style="list-style-type: none"> ・陶芸 7年

(10) 項目間の関係

二人で踊るコンビスタイルでの立って踊る人（スタンディングパートナー）と車いすに乗って踊る人（ウィールチェアドライバー）のパートで比較した。サークル参加以前のダンス経験の有無において有意な差が見られた。スタンディングパートナーにダンス経験者がいなかったのに対し、ウィールチェアドライバーは中途障がい者を含め半数に経験があった。

年代による比較では、開始年、ダンス経験の有無、活動後の生活面での変化、気持ちの面での変化、身体的な面での変化、困ったことや要望があるか、他の活動への参加との間に有意な差は見られなかった。

開始年による比較では、ダンス経験の有無、活動後の生活面での変化、気持ちの面での変化、身体的な面での変化、困ったことや要望があるか、他の活動への参加との間に有意な差は見られなかった。

5 考察

車椅子ダンスサークルへの参加によって気持ちの面で変化が見られたとする人が多かった。記述内容をみると、ウィールチェアドライバーは気持ちに張りが出た、積極的になった、ストレス解消、楽しさという自己の意識に関することが多くあげられていた。一方、スタンディングパートナーはダンスのパートナーを含めて他の人との関わり合いを通じて自己の新たな面を発見したり精神的な成長を感じたり、他の人に喜んでもらえることに嬉しさを感じるというように、他者との関係性を重視している傾向が見られた。身体面での意識の変化は他の面と比較すると低かった。両パートともに姿勢が良くなったり、気を配るようになったという記述が見られ、練習以外の日常生活の場でも身体意識（ボディー・コンシャスネス）が持続していることが伺われた。体力の維持や向上についてはウィールチェアドライバーに若干の記述が見られるのみであった。今回の調査では体力測定等を行っておらず客観的な指標がないが、休憩を挟みながらも1回2時間を越える練習時間や週1回から2回の練習頻度から、加齢に伴う体力低下を防ぐ効果があると予測できる。生活面での意識の変化は、両パートともに練習日にあわせて体調管理をしたり、食生活に気を配る、生活にメリハリがつく等の意見がみられた。単調になりがちな日々の生活が、定期的な外出と運動の機会によってリズムが生まれ、次回への準備として健康的な生活習慣を心がけている姿勢が見られる。

サークル加入以前のダンス経験の有無はウィールチェアドライバーが有意に高く、スタンディングパートナーに経験者はいなかった。ウィールチェアドライバーは参加以前からダンスに対する興味や関心を持っている人が多く、スタンディングパートナーは上述のように他者とかわる活動に関心が高い傾向が見られ、サークル参加の動機が異なることが考えられる。

サークルの活動内容はサークル内にとどまらず、練習の他に発足当初から積極的に発表や講習会、ボランティア等を行い地域社会につながりを持っている。サークルのメンバーは新加入者が少なく比較的固定しているが、イベント的な活動を通して新しい人や事柄に接する緊張感や期待感があり、練習における停滞感や意欲の減退を防いでいると考えられる。

指導者へのインタビューから、ボランティアなどを通して障がいのある人が指導者として健常者とかわる効果も大きいということであった。障害のある人とない人とが一緒に活動する場合に対等性が維持されることは重要である。障害のある人の経験や修得された技能はコミュニケーションの手段として非常に有効である。指導者が個人の尊厳を大切にしている姿勢が、

インタビューの間随所に感じられた。

外部に開かれ閉鎖的でないサークルの方針が、技術的向上や新しい種類のダンスを覚えると
いった個々の目標設定につながり、継続の動機付けになっていると思われる。

6 課題と今後の予定

活動場所への移動に関する問題をあげた人が多かった。特に冬季は積雪により移動手段の確保と経済的負担が大きく、活動率の低下を余儀なくさせる。移動の困難さは北方圏特有の課題であり、また障がいのある人のみならず高齢者のスポーツ実施を阻害する要因ともなっている。北欧など行政的に移動の便宜が図られ整備されている国ではスポーツの参加率が高いので、今後事例を調査していきたい。同時に、スポーツ等の活動のために公的財源を投入するためには、必要性や効果に対して人々の理解が広がることも必要である。

駐車スペース等施設設備に関する指摘もあった。障がいのある人と障がいのない人が接する機会が増えることにより、この問題に目が向けられ改善につながるだろう。外出機会が増えることは、理解が進むことと相互に作用する。

練習時間や機会（滝川市）の制限については、指導者育成も課題となるであろう。現在行われている講習会等でのメンバーによる指導を発展させ、ウィールチェアドライバーが指導者になることによって、新しい技術やダンスのスタイルを開発する可能性もあると考えられる。

参加者数が少ないこともあげられた。特に若年齢層で新規の加入者が少ない。特別支援学校で指導を行って来て卒業後も続けたいという要望があるが、重度の障がいで通うことが困難である場合が多いという。スタンディングパートナーの参加動機の傾向から、ノーマライゼーションの学習を通してアプローチすることも有効かもしれない。競技ダンスのスタイルだけでなく、自分の好みの音楽や振り付けで踊ることも可能であることの認知が広がると、ウィールチェアドライバーとしても参加しやすくなるのではないだろうか。

今後の予定としては、北海道内14箇所くらいで紹介するイベント開催（2009年以降4月～11月）を計画している。

引用参考文献

- 1) 内閣府：平成19年度版障害者白書，2007
- 2) 内閣府「障害者に関する世論調査」2007
- 3) 日本車いすダンススポーツ連盟札幌支部「ハーモニー」：車いすダンスフェスティバル LOVE2006 車いすダンス～hoo～報告書，2006
- 4) 矢部京之助・草野勝彦・中田英雄 編著：アダプテッド・スポーツの科学 障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論，市村出版，2004